



特集

東京オリ・パラ

聖子

組織委員会長の素顔

の五輪

ジャーナリスト
黒田 伸

5話

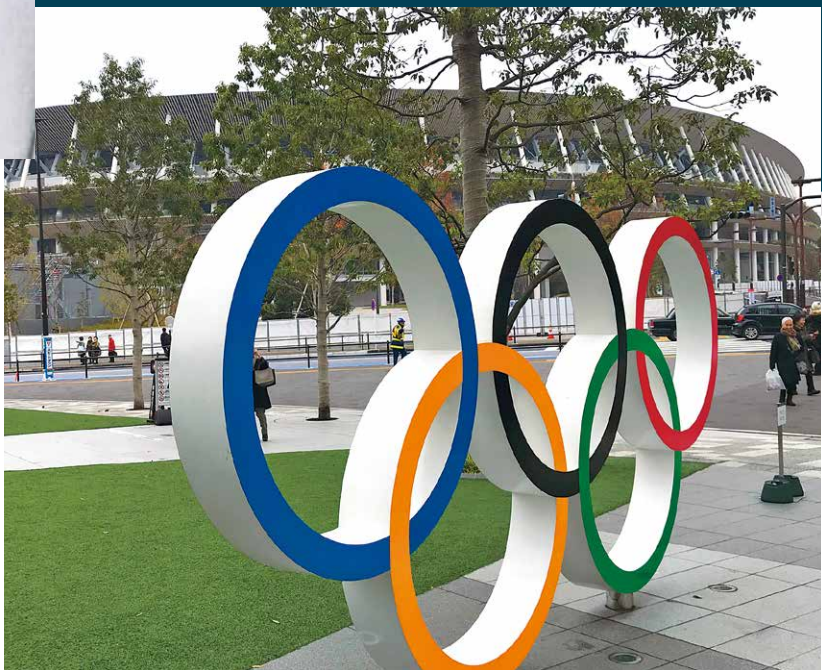
コロナ禍の中で1年延期された東京オリンピックが7月23日に開会式を迎える。男女のマラソンと競歩競技が札幌で開かれるが、組織委員会として難しい大会運営のトップにいるのが本道出身の橋本聖子氏だ。〓五輪の申し子〓と言われるスーパーウーマンにまつわる5つの逸話・秘話を掘り起こした。

(7月7日現在)

■プロローグ

開会式会場となる新国立競技場に隣接するオリンピック・ミュージアム。

6月中旬に訪れると、感染症予防のため、予約が必要なこともあって、来館者は数えるほど。2階の「オリンピックストーリー」のコナーには、五輪に出場した選手のインタビュ映像が繰り返し流されているが、その中



▲橋本聖子氏(自身のオフィシャルサイトより)
右は五輪マークも鮮やかな新国立競技場

テレビでその光景を見た聖子は子どもながらに「これがオリンピックなんだ」と思ったという。「意味もわからないままに父との合言葉だったオリンピックが自分の目指すものとして脳内にインプットされ

で、異色なのは組織委員会長の橋本聖子氏の5分ほどの映像だ。

■ストーリー1

五輪の意味も知らず

21の質問に本音で答えている内容は「聖子」を知る上で興味深い。

橋本聖子(以下、敬称略)は1964年10月5日生まれ。前回の東京五輪開会式の5日前に生まれた。聖子という名は、早来町(当時)から開会式に駆け付けて聖火を見て感動した父親の故・善吉さんが、「オリンピック選手にしたい」という願いを込めてつけたの

は有名な話。

父の口癖を子守唄のように聞かされて育つため「生後5日目からイメージトレーニングを施されてきたようなものかもしれない」と聖子は振り返っている。

五輪への思いが鮮明になったのは1972年の札幌冬季五輪だった。笠谷幸生、金野昭次、青池清二がスキージャンプ70級(現ノーマルヒル)で金、銀、銅と3つのメダルを獲得し、国旗掲揚台を日の丸が独占した。



▲オリンピックミュージアムに飾られている幼少期の写真

た」
小学校2年生で「生意気にも、スケート選手になつた」

■ストーリー2

病気との闘い

掲揚台を独占した日の丸が風になびく光景に「自分もあそこに立ちたい」と思い、すぐに地元のスケート少年団に入った。小学3年の冬にはいい記録が出るまでに成長したが、ここから苦難が始まる。

学校での体育授業さえも禁じられた。

春先に突然、腎臓病を患って入院。2ヵ月で退院できたものの療養生活は2年も続き、スケートはもちろん、

本格的に練習が再開できたのは中学2年の親元を離れ、苫小牧市のコーチの自宅に下宿しながら高校卒業までの5年間、スケートに打ち込んだ。高校1年で世界大会に出場し、2年で全日本チャンピオンに。夢に向かってまい進し、病気のことも忘れていた。



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)